

# 吾輩は猫である

夏目漱石

わがはい  
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見<sup>けんとう</sup>当<sup>けんとう</sup>がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番どうあく<sup>どうあく</sup>獰<sup>どうあく</sup>悪<sup>どうあく</sup>な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を<sup>つかま</sup>捕<sup>つかま</sup>え<sup>え</sup>て煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の<sup>てのひら</sup>掌<sup>てのひら</sup>に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの<sup>みはじめ</sup>見<sup>みはじめ</sup>始<sup>みはじめ</sup>であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで<sup>やかん</sup>薬<sup>やかん</sup>缶<sup>やかん</sup>だ。その後猫にも<sup>ご</sup>だ<sup>ご</sup>い<sup>ご</sup>ぶ<sup>ご</sup>逢<sup>ご</sup>ったがこんな<sup>かたわ</sup>片<sup>かたわ</sup>輪<sup>かたわ</sup>には一度も<sup>でく</sup>出<sup>でく</sup>会<sup>でく</sup>わ<sup>でく</sup>した事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと<sup>けむり</sup>煙<sup>けむり</sup>を吹く。どうも<sup>む</sup>咽<sup>む</sup>せ<sup>む</sup>ぼ<sup>む</sup>くて実に弱った。これが人間の飲<sup>たばこ</sup>む<sup>たばこ</sup>煙<sup>たばこ</sup>草<sup>たばこ</sup>というものである事はようやくこの頃知った。<sup>わがはい</sup>吾<sup>わがはい</sup>輩<sup>わがはい</sup>は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見<sup>けんとう</sup>当<sup>けんとう</sup>がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番どうあく<sup>どうあく</sup>獰<sup>どうあく</sup>悪<sup>どうあく</sup>な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を<sup>つかま</sup>捕<sup>つかま</sup>え<sup>え</sup>

に煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の<sup>てのひら</sup>掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの<sup>みはじめ</sup>見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもつて装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで<sup>やかん</sup>薬缶だ。その<sup>ご</sup>後猫にもだ<sup>あ</sup>いぶ逢ったがこんな<sup>かたわ</sup>片輪には一度も<sup>でく</sup>出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと<sup>けむり</sup>煙を吹く。どうも<sup>む</sup>咽せぼくて実に弱った。これが人間の飲む<sup>たばこ</sup>煙草というものである事はようやくこの頃知った。